

中国初期仏像の成立事情に関する試論 — 揺銭樹の視座から —

早稲田大学 金子 典正

中国仏教初伝期に属する仏像は、後漢時代後期から四川省楽山県の崖墓浮彫や同省を中心に出土する揺銭樹、山東省の画像石墓等にみられる。こうした初期仏像は、黄帝老子と共に「浮屠」を祀った楚王英の崇仏や『後漢書』襄楷伝の記事と並び、中国仏教伝来の事実を示す貴重な作品であり、中国在来の神仙図像の中で表されることから、神仙として受容された例証であることが先学によって指摘されてきた。しかし、何故に受容され造形化されたのか、という初期仏像の成立事情については、その有様を明確に伝える資料が欠落していたため、具体的に論じられることは殆どなかった。本発表では近年報告された後漢時代の揺銭樹に注目すると共に、同時代のインド世界における在家仏教徒の釈迦に対するイメージを再確認することによって一試論を提示したい。

1998年と2002年、『文物』に陝西省城固県と四川省安県の後漢墓から出土した揺銭樹が報告された。揺銭樹は死者の冥福と来世の安寧を願って副葬された明器で、幹や枝等に五銖銭・神仙図像・吉祥文を配して死後の理想世界を表象し、象徴的な頂部には通常西王母や太陽神としての鳳凰が配される。しかし、上記2例の頂部には透彫で仏像が一際大きく表されており、仏像が中国の最高神に取って替わるほどの神であったという当時の認識が看取できる。

かつて山田明爾氏は初期仏像の成立について、經典中で在家信徒に説かれた「布施善行が死後の生天を約束する」という生天思想に着目され、これが東伝して死後の昇仙昇天を願う中国世俗の願望と一致し、仏像が神仙図像の中で表されるに至ったとされた。しかし、山田氏は經典以外の具体事例を挙げておらず、また現存するインド仏教碑銘を確認すると、生天思想はみられず、信徒達は布施寄進の見返りとして利益安楽や延命、そして涅槃の獲得を願っていたことが判明する。このうち涅槃は *amṛta* と説かれるように不死(甘露)を意味する。つまり、釈迦は現世利益と不死を叶える神であり、こうしたイメージが東伝したからこそ、中国の世俗にも容易に受容されたのではあるまいか。

また注目されるのは初期漢訳經典に「天中天」という釈迦の尊称が頻出することである。この尊称は、インド起源ではなく、イラン系民族の「王の中の王」「神の中の神」という称号から生じたもので、北インド出土の4-5世紀石板銘文にも確認できる。つまり、東西交易で中国に流入した胡人達が釈迦を天中天と認識していた蓋然性は極めて高く、一方、中国の世俗にとって「神の中の神」といえば黄帝や西王母であり、上記揺銭樹からは仏を天中天とみなした造形的特徴が読取れる。すなわち、新来の西方の神は中国の最高神に匹敵し、且つ現世利益と不死を叶える神だったのである。かくして「浮屠」が黄帝老子と共に祀られ、仏像は西王母像に替わる存在となり、神仙図像の中で造形化されるに至ったと考えられるのである。